平成22･23年度

熊本県教育委員会指定・熊本県学校給食会委嘱

学校給食・食育推進校

研究紀要

【研究主題】

「命を大切にする生徒の育成」

～食育における指導法の工夫および学校給食の充実を通して～

平成23年10月20日（木）

熊本県阿蘇郡高森町立高森東中学校

は　じ　め　に

近年、朝食欠食や偏った食事等による食生活の乱れから肥満傾向の増大、痩せ願望、生活習慣病の増大等に代表される健康問題が顕著になり、望ましい食習慣は国民的課題であるともいわれています。

そのような中、平成１７年７月に施行された「食育基本法」の前文には、特に子どもたちの食育について「・・・・子どもたちに対する食育は、心身の成長及び人格の形成に大きな影響を及ぼし、生涯にわたって健全な心と身体を培い豊かな人間性を育んでいく基礎となるもの」と規定されました。

さらに今回、「学習指導要領総則」に初めて「食育」が明記され、学校給食を教材として活用しながら、学校教育活動全体を通じて総合的に食育を推進することが求められています。

それを受け、「食育」は知育、徳育及び体育の基礎であるという認識のもと生徒が食に関する知識や能力等を発達段階に応じて総合的に身に付けることができるよう、各教科等における個々の食に関する指導を教科横断的な指導として関連付け、学校教育全体で取り組んできました。

本校では、「命を大切にする生徒の育成」をテーマとし、サブテーマを「食育における指導法の工夫および学校給食の充実を通して」と設定し、研究仮説を立て取り組んできました。その中で、昨年度まで取り組んできました「言語活動充実のための工夫」また、「環境教育」も根底に置きながら実践しているところです。

この実践を通して、生徒の「食育」に対する意識も少しずつではありますが高まってきました。今後も引き続き研究実践を継続していきたいと考えます。

最後に、この取り組みの成果や課題を検証し、今後の方向性を見いだしていきたいと考えています。

忌憚のないご指導、ご助言を賜りますようお願い申し上げます。

平成２３年１０月２０日

高森町立高森東中学校
校長　田邉 鶴芳

目　次

はじめに

ページ

１　研究主題 ---------- 1
２　研究主題設定の理由 ---------- 1
（1）今日的課題から ---------- 1
（2）本校の教育目標から ---------- 1
（3）生徒の実態、保護者の願いから ---------- 1
（4）本校校内研究の流れから ---------- 2
３　研究主題について ---------- 3
（1）「命を大切にする生徒」について ---------- 3
（2）「命を大切にする生徒」と「食に関する指導の目標」との関連について ---------- 4
４　研究の仮説 ---------- 4
（1）仮説１ ---------- 4
（2）仮説２ ---------- 4
５　研究の構想 ---------- 5
６　研究の実際 ---------- 5
（1）食育推進部の取組 ---------- 5
①　食に関する指導の年間指導計画の作成とそれに基づく教科等の指導 ---------- 5
ア　学校栄養職員・養護教諭の授業への参画 ---------- 5
イ　教科等と給食の時間における指導との関連 ---------- 7
ウ　家庭・地域との連携 ---------- 8
エ　授業における食に関する素材の活用 ---------- 10
②「命のサイクル」を中心とした教育実践（総合的な学習の時間） ---------- 11
ア　「体験活動」における取組 ---------- 11
イ　「大地タイム」における取組 ---------- 12
ウ　「大地タイム」の活動例 ---------- 12
（2）学校給食部の取組 ---------- 13
①　給食指導年間計画に基づいた指導 ---------- 13
②　給食の時間の指導の工夫 ---------- 13
③　献立の工夫 ---------- 14
④　家庭との連携 ---------- 15
⑤　保小中および地域との連携 ---------- 17
７　研究の成果と課題 ---------- 18
（1）仮説１について ---------- 18
（2）仮説２について ---------- 19

おわりに

参考文献

1　研究主題

命を大切にする生徒の育成

～食育における指導法の工夫および学校給食の充実を通して～

2　研究主題設定の理由

(1) 今日的課題から

近年、食生活を取り巻く社会的環境の変化などに伴い、子どもの食生活の乱れや肥満傾向の増大、過度の痩身などが見られるようになり、生活習慣病と食生活の関係も指摘されるなど、望ましい食習慣の形成は国民的な課題となっている。特に、食生活の乱れを要因とした情緒が安定しない子どもの問題や生活習慣病の問題など、解決しなければならない問題は増加傾向にあり、学校教育における食育の重要性が増してきている。

また、対人関係においてキレる子どもの増加や命の尊さを軽視した問題行動等の増加が見られるなど、学校教育において精神面を含めた心の教育の重要性がとりざたされている。これらの問題行動には生活リズムが少なからず関与し、とりわけ食との関わりが深いとも言われている。

このような今日的課題の解決にあたり、食と命との関わりを重視した食育を推進していくことは大切であると考える。そこで、生徒の望ましい食習慣の形成を図ることを通して、命を大切にする生徒の育成を目指す教育の研究を進めることは、価値ある教育活動であると考え本研究主題を設定した。

(2) 本校の教育目標から

本校の教育目標は、「豊かな心と確かな学力を身に付け、主体的に考え・判断し・行動する心身ともに健康な希望あふれる東中生徒の育成」である。これまで積み上げられてきた本校の特色ある教育活動(環境教育)の成果を継承し、さらに、「食育」を推進することで、本校の教育目標の具現化を図ることができるものと考え本研究主題を設定した。

(3) 生徒の実態、保護者の願いから

①　生徒に対するアンケート調査結果から

平成 22 年 7 月、全校生徒を対象とした食に関するアンケート調査を実施した。この調査は、熊本県が行った「食育推進に関する調査」の項目をもとに作成したものである。本校調査結果を本県の傾向と比較してみると、全体的には大きな差は見られず、平均的な食生活習慣を有していることが分かった。しかし、以下の項目については、顕著な差が見られた。(○大きく上回っているもの　△下回っているもの)

○**朝食は毎日食べている**		(本校 80.0 %　県 75.8 %)	
○**家族とともに食べている**		(本校 64.8 %　県 34.8 %)	
○**早寝早起きの習慣がついている**	※ 7 時前に起床	(本校 96.0 %　県 74.2 %)	
	※ 11 時までに就寝	(本校 64.0 %　県 33.2 %)	
△**毎日の排便の習慣がついてない**	※ 毎日排便がある	(本校 36.0 %　県 48.7 %)	

また、本校独自の調査項目では、次のような課題も明らかになってきた。

△家庭においてスナック菓子や清涼飲料水を週３～４回以上摂取している生徒が多い。
△量や栄養のバランスを考えないで食事をしている生徒が多い。
△食に関する感謝の心が低い生徒が多い。

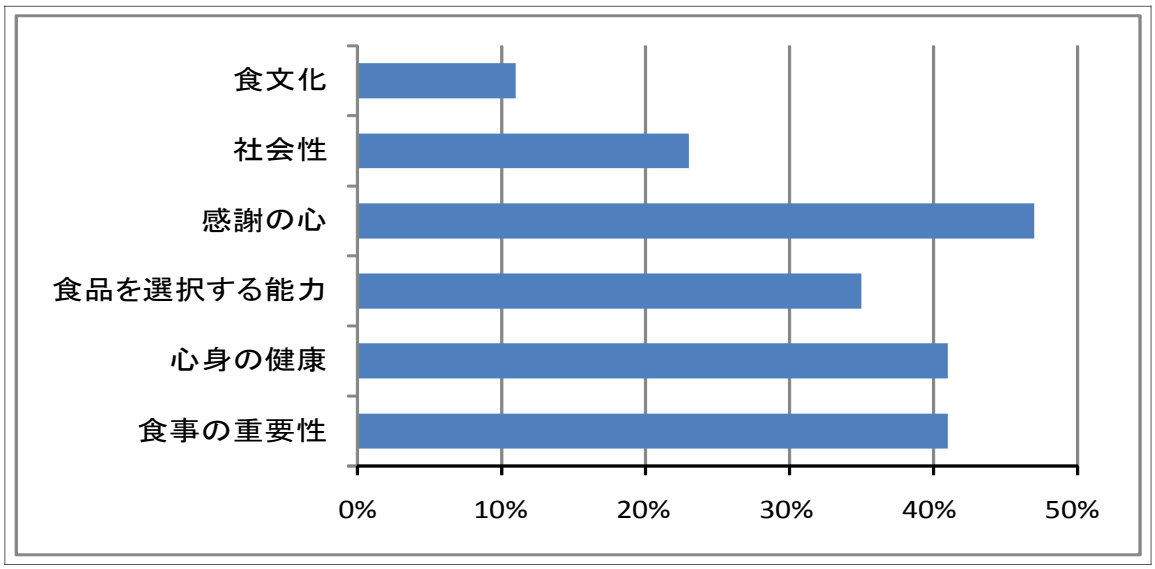
② 保護者に対するアンケート調査の結果から

保護者に対して実施したアンケート調査の結果から、本校の保護者は「食」について高い関心を持っていることが分かった。特に、家庭の食事に関する質問に対しては、以下のような結果が得られた。

	バランスよく食べさせているか？	マナー面の指導（はしの持ち方など）を行っているか？	楽しく会話しながら食べているか？
今でもよく行う。	70.6 %	23.5 %	70.6 %
今は行わないが、以前はよく行っていた。	17.7 %	53.0 %	17.7 %
あまり行っていない。	11.7 %	23.5 %	11.7 %

多くの家庭で食事に関する指導は行っているものの、一部においては中学校入学以前と比べ、家庭における食事に対する指導が十分に行われていない実態が明らかになった。

また、「学校教育活動における『食に関する指導』では、どんなことを指導してほしいですか？」という問いに対して、以下のような結果が得られた。



この結果から、「食を通した感謝の心」、「心身の健康」及び「食事の重要性」の指導を望む保護者が多いことが明らかになった。

（4） 本校校内研究の流れから

本校では平成１６年度より、近隣の山林から採取した土着の有用微生物を活用した「命のサイクル」と称する環境浄化活動に取り組んでいる。そこで、本研究では本校のこれまでの研究や実践に「食育」の視点を加え、継続・発展させるならば、特色ある教育活動が展開できるのではないかと考えた。

3　研究主題について

(1)　「命を大切にする生徒」について

本校では、「命を大切にする生徒」像を次のようにとらえている。

A	健康に関する確かな知識・技能を身に付け、それを日々の生活の中で実践するなど、生涯にわたって、自分の心身の健康の維持・増進を図ろうとする生徒
B	人権尊重の精神を根底に据えながら、豊かな人間関係を築くことのできる生徒
C	自然の恩恵や先人をはじめ多くの人々の知恵・労働・努力により、自他の命が守られているということに気づき、環境や文化を尊重することができる生徒
D	健康で文化的な生活を維持していくために必要な学力を身に付け、自分の将来に向けた進路を切り拓くことができる生徒

A は主として自分自身に関すること、B は主として周りの人との関わりに関すること、C は主として学習の対象を空間的・時間的に捉えながら、自然や社会との関わりを考えさせていくこと、D は進路保障が本校の課題であることを踏まえて設定している。

(2)「命を大切にする生徒」と「食に関する指導の目標」との関連について

「食に関する指導の手引」(文部科学省)に示された「食に関する指導の目標」と「命を大切にする生徒」像との関連を以下のようにとらえることにした。

食に関する指導の目標 ＼ 「命を大切にする生徒」像		A 自身の健康の維持・増進	B 豊かな人間関係	C 環境や文化の尊重	D 学力と進路保障
食事の重要性	食事の重要性、食事の喜び、楽しさを理解する。	○			○
心身の健康	心身の成長や健康の保持増進の上で望ましい栄養や食事のとり方を理解し、自ら管理していく能力を身に付ける。	○	○		○
食品を選択する能力	正しい知識・情報に基づいて、食物の品質および安全性等について自ら判断できる能力を身に付ける。	○			○
感謝の心	食物を大事にし、食物の生産等に関わる人々への感謝する心を持つ。		○	○	○
社会性	食事のマナーや食事を通じた人間関係形成能力を身に付ける。		○	○	○
食文化	各地域の産物、食文化や食にかかわる歴史等を理解し尊重する。			○	○

これらの視点をもとに、食に関する指導を通して、望ましい食習慣を形成し、命を大切にする生徒の育成を目指して取り組んでいくことにした。また、命を大切にする生徒の育成は食に関する指導だけで完結するものではなく、人権教育・安全教育・環境教育・国際理解教育・道徳教育等、学校における全ての活動で行われるべきものであるということも念頭に置き、食育との重なりを重視しながら取り組んでいくことにした。

4　研究の仮説

本研究の具現化をめざすために、次の２つの仮説を設定した。

（1）仮説１

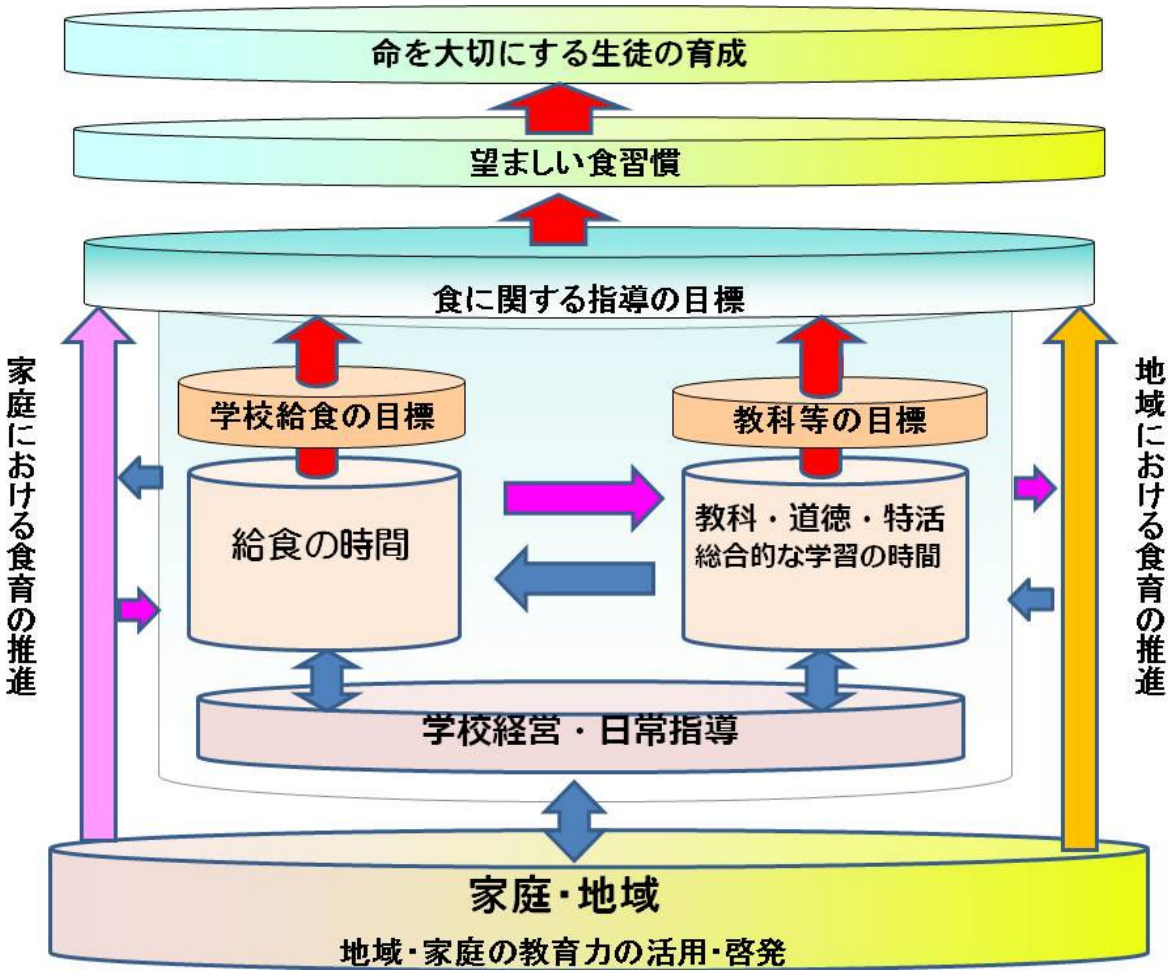
各教科、道徳、特別活動及び総合的な学習の時間において、命との関連を意識し、各教科等の目標及び「食に関する指導の目標」を踏まえた食に関する指導の工夫改善を行い、家庭・地域との連携を図っていくならば、望ましい食習慣を基盤とした「命を大切にする生徒」の育成を図ることができるであろう。

（2）仮説２

給食の時間を中心に、食に対する関心や意欲を高める工夫をし、家庭・地域との連携を図っていくならば、望ましい食習慣を基盤とした「命を大切にする生徒」の育成を図ることができるであろう。

5　研究の構想

本研究の構想は、下図のとおりである。



6　研究の実際

仮説１を具現化するために食育推進部を、仮説２を具現化するために学校給食部をそれぞれ設け、研究を進めることにした。

⑴ 食育推進部の取組

食育推進部では、次の２つに分け、取り組むことにした。

①	食に関する指導の年間指導計画の作成とそれに基づく教科等の指導
②	「命のサイクル」を中心とした教育実践（総合的な学習の時間）

本校では、各教科等の目標と「食に関する指導の目標」（食事の重要性・心身の健康・食品を選択する能力・感謝の心・社会性・食文化）を踏まえた食に関する指導の年間指導計画を作成し、取組を進めてきた。

授業実践を行う際、食育と教科等の関わりを大切にするために、教科等の特質を踏まえながら、全ての教科等を次の表のⅠ～Ⅲ型の３つに分類し、研究を進めることにした。

	食育と教科等の関わり	教科等
Ⅰ型	教科等の指導内容そのものが食に関する指導内容と重なるもの	家庭科、保健体育科 特別活動
Ⅱ型	教科等の指導内容の一部が食に関する指導内容と関連するもの	理科、社会科、道徳 総合的な学習の時間
Ⅲ型	教科等の素材として食に関する内容が活用できるもの	国語科、数学科、英語科 技術科、音楽科

（「食育実践マニュアル」［熊本県教育委員会］参照）

①　食に関する指導の年間指導計画の作成とそれに基づく教科等の指導

本校では、食育を推進するにあたり、次の４つの視点を設け取り組むことにした。

ア	学校栄養職員・養護教諭の授業への参画
イ	教科等と給食の時間における指導の関連
ウ	家庭・地域との連携
エ	授業における食に関する素材の活用

ア　学校栄養職員・養護教諭の授業への参画

学校栄養職員・養護教諭は、専門的な知識を生かして、各教科担当者と食に関する単元（題材）の教材研究を行い、Ｔ２として授業へも積極的に参画している。また、授業に直接参加しない場合も、必要に応じて授業者への資料や情報の提供を行っている。

□資料　授業実践例　第１学年　理科

【題材名】「植物のからだのつくりとはたらき」（「命を大切にする」生徒）像Ａ・Ｃ・Ｄ

【本時の目標】

○花の基本的なつくりとはたらきを関連付けて考え、植物が子孫を残す（生殖の）仕組みを理解することができる。

【授業の実際】

主な学習活動と授業の様子	指導のポイント
1　本時の学習課題を把握する。 エンドウを使って花の仕組みとはたらきを調べよう。	【課題把握における工夫】 ・エンドウの果実の実物を観察し、学習への興味・関心を持たせる。
2　エンドウの果実(さや)を調べて花の名残をさがし、スケッチをする。 果実をあけて種子(エンドウ豆)を取り出し観察する。	【実験観察の技能定着に向けた工夫】 ・器具の名称や操作方法等を身につけさせる。
3　エンドウの花のどの部分が果実や種子になったのかを考え説明する。 ぼくは、胚珠が豆（グリンピース）になったと思うよ。	【言語活動充実のための工夫】 ・自分の思考（分析）を他者にわかりやすく表現（説明）する活動を通して、思考の深化を図る。
4　種子（エンドウ豆）を解剖し観察する。 種子の中はどうなっているか観察してみよう。 **赤ん坊(胚)が弁当(子葉)付きで生まれる。その命と栄養を私たちがいただくことになる。「いただきます。」というのはそういう意味だよ。** 学校栄養職員から、エンドウ豆の役割や栄養面等に関する説明を聞き、理解を深める。 エンドウは、子孫を残すために豆の部分に栄養をたくわえています。その養分の中には、私たちの体にものよい食物繊維やカロテンやビタミンＣも多く含まれています。	【研究テーマとの関連】 ・「命を大切にする生徒の育成」というテーマに合わせ、エンドウの生殖の仕組みを理解することで、種子を命ととらえさせ、食に関する指導の「感謝の心」につなげる。 【食育との関連】 ・栄養を豊富に含み、健康維持に重要であることを伝える。 【学校栄養職員等との連携】 ・理科の学習と給食をつなぎ、食に対する関心を高めさせる。
5　本時のまとめとして、被子植物の仲間を殖やす仕組みを確認する。 雌しべをすかして見てごらん。 あーっ、胚珠が並んでいるのがすけて見える。	【基礎基本の定着のための工夫】 ・実際に、エンドウの花の雌しべを取り出して光にすかして見たり、中身を解剖して確かめたりすることで、本時の学習の理解をより確かなものにする。

【考察】

実物のエンドウの花と果実（さや）と種子を使い、その内部を分解・観察・比較させたことにより、花の基本的なつくり等を生徒に理解させることができた。また、植物の子孫を残す仕組みを理解させることで、生徒は「命をいただく」という言葉の持つ意味を捉えることができた。併せて、学校栄養職員によるエンドウ豆の役割や栄養面での説明を加えることで、「食」と「理科」が「命」という点で深く関連していることを生徒に知らせることができた。

イ　教科等と給食の時間における指導との関連

給食の献立に教科等における既習内容を反映させるなど、授業での学びを給食の時間と関連付けた、給食の時間を「食育」の実践の場とする取組を行っている。

□ 資料　授業実践例　第１学年　社会(歴史)

【題材名】	第２章：古代までの日本　２　古代国家の歩みと東アジア世界 「奈良時代の人々のくらし」(「命を大切にする生徒」像Ａ・Ｃ・Ｄ)

【本時の目標】
○資料をもとに奈良時代の人々のくらし(衣・食・住)の特徴を調べ、発表できる。　(資料活用の技能・表現)
○身分によって人々の生活に大きな差があることに気づき、その根拠となる理由を考えることができる。　(社会的な思考・判断)

【授業の実際】

主な学習活動と授業の様子	指導のポイント
1　本時の学習課題を把握する。 奈良時代にタイムスリップして、奈良時代の人々の生活を探ろう。 2　貴族と庶民の生活(衣・食・住)を予想する。	【導入・学習形態の工夫】 ・生活に密着した身近な話題から興味関心を抱かせ、自ら課題を設定、解決できるような導入や課題の設定を行う。
3　ペアを組み、資料(本・インターネット)をもとに調べ、まとめる。 4　調べたことを発表し、検証する。 貴族は品数も多く、あわびやえびなど豪華な物を食べていました。(食の領域を調べた生徒)	【言語活動の場の設定の工夫】 ・これまでの学習活動で習得した知識を活用して、互いの学びを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる場とする。
学校栄養職員からの説明を聞く。 奈良時代の平均寿命は、約３０歳。その理由の一つとして、「栄養失調」があったそうです。 貴族の食事は何と「1,426kcal」です。給食２食分よりちょっと少ないくらいかな。 庶民は「391kcal」です。しかも、１日２食。庶民の食事１日分が、今の給食の１食分です。	【学校栄養職員の授業参画】 ・学校栄養職員による「摂取カロリー」の説明をもとに、貴族と庶民の食生活を対比させ、少数の貴族が力を持っていたことや律令に基く税制の存在に気づかせようとする教科担任の指導につなげていく。 【教科と給食の時間との関連】 授業で取り組んだ「庶民のの食事」を給食で提供した。また、カボチャは ECO 農園で栽培したものである。
5　身分によって生活に大きな差が出る理由を考える 6　学習のまとめをする。	 発芽玄米ご飯 ひじきの煮物 カボチャ汁 ちくわの利休煮 (栄養的に付加)

【考察】
「貴族と庶民にこんなに差があるなんて・・・驚きました。」と授業後の感想に書いてきた生徒がいるなど、奈良時代の人々のくらしについてより具体的な資料(実際の食事)を根拠として身分の違いを考えることができた。
併せて、社会科で学習した内容を給食に提供したことで、奈良時代の食事を目の当たりにし、給食の時間が社会科の学習内容を確認する場となった。

ウ　家庭・地域との連携

(ｱ) 家庭との連携

食育の推進を図るためには、家庭との連携は重要である。そこで、教科・道徳・学活等の授業の中に保護者からの聞き取りの内容を生かしたり、保護者の授業への協力をお願いしたりしている。

□ 資料　授業実践例　第１学年　国語（題材全体について記述）

【題材名】「わかりやすく説明しよう～情報を選ぶ」（「命を大切にする生徒」像Ｂ・Ｃ・Ｄ）

【題材について】

ア　題材の目標

伝える相手や目的を明確にして、情報を集めたり、情報を整理してわかりやすく伝える文章を書いたりする力を育成する。

イ　指導上の留意点

生徒や地域の実態から、「郷土料理」をテーマに、自分の体験と親からの聞き取りをもとに情報を集め、構成メモを作成させる学習を行うことにした。事前に各家庭へ文書を配布し、郷土料理や伝統的な食べ物について、生徒に話してもらうよう依頼した。

【授業の実際】

1　「郷土料理」について知っていることを伝え合った後、教師作の例文を聞く。

教師の作文　母親とともに高菜を漬けた体験を綴ったもの。手伝った体験の部分、漬け方や料理の仕方など母親からの聞き取りの部分、さらに高菜漬けに対する思いの部分という３つの要素から構成されている。

2　自分で書きたい郷土料理を決め、材料集めをする。

自分の体験　→　マッピング法　　それ以外　→　家族や親せきから聞き取り

教師の作文を、体験、親からの聞き取り、思いの３つに分ける。教師の作文の体験の部分を例に、マッピング法による材料集めの具体的な方法を知る。

3　構成メモを作る。

4　作文を書く。

生徒作文（一部抜粋）　家に着くと、まず、にわとりの足を結びます。しめる作業はじいちゃんがします。（中略）どんどん血が減っていき、全部ぬけると、お湯ににわとりの体をつけ、毛をとります。次からは調理です。（中略）　最初みなさんは気持ち悪いと感じたのではないでしょうか。でも、動物や生き物を食べるということは、こういうことです。私はさばいて料理されるところを見ているから、動物のありがたみが分かります。動物がいるから、私たちは生きていくことができるのです。

5　作文を聞き、友達の作文における文章表現や内容について、よいところを発表する。

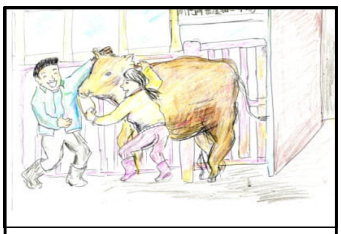
【考察】

「教師の作文」を例に取材の仕方等を学習することにより、テーマに適した材料を集めることができた。事前に保護者へ教師作の作文を含む協力依頼の手紙を出していたため、スムーズに協力を得られ、情報を整理してわかりやすい文章を書くことができた。

併せて、生徒のほとんどの作文が食材や家族への「感謝」・郷土の「食文化」の大切さなどに触れていること、さらに、動物の「命をいただく」という「命の大切さ」そのものを考えた作文があることなど、本校の研究テーマとの関連した、価値ある取組ができた。

(ｲ) 地域との連携（地域教材の作成）

食育の推進にあたり、自分たちの暮らす地域を題材とした自作教材を作成した。道徳（２年生）では、畜産農家を営まれている保護者からの取材をもとに、教材を作成し、授業実践を行った。



授業で使用した挿絵

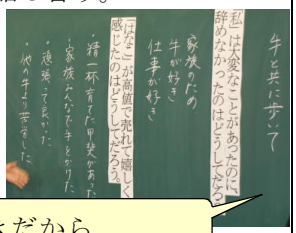
□ 資料　授業実践例　第２学年　道徳

［資料のあらすじ］
山田さん（仮名）はお父さんの死をきっかけに、本格的に畜産を始められた。畜産の仕事は決して楽ではない。放牧中の牛が一度に２頭も谷底に落ちたこともある。病気になれば、家族全員で世話をした。看病の甲斐があって、その牛が高値で売れたときはとてもうれしい。山田さんは、自分の育てた牛が最終的にどんな人に買われ、食べられたか、知りたいと語られていた。

【題材名】「働く喜び」資料名「牛と共に歩いて」
（４－(5)勤労・奉仕・公共の福祉）（「命を大切にする生徒」像Ｂ・Ｃ・Ｄ）

【本時の目標】　山田さんの仕事にかける思いを通して、働くことのすばらしさを理解し、人や社会のために努めようとする心情を高める。

【授業の実際】

主な学習活動と授業の様子	指導のポイント
1　阿蘇特産の牛肉を見て、気付いたことを話す。 どんな人の手がかかっているんだろうね。	【意識化の過程における工夫】 ・阿蘇特産である赤牛の肉を見せ、食べ物としての牛を意識させる。
2　「牛と共に歩いて」を読み、話し合う。 山田さんは大変なことがあったのに、辞めなかったのはどうしてだろう？  牛が好きだから。仕事が好きだから。 高値で売れた時、山田さんはどんな気持ちだっだろう？ 頑張ってきたことが報われうれしいと思ったから 山田さんが見てみたい食卓とはどんなイメージかな？	【価値の追求・把握における工夫】 ・働くことのすばらしさに気付くと共に、「人の役に立つ」という視点で仕事を行うことのすばらしさ、価値を追求していく。 ・書くことで考えをまとめることができるようワークシートを活用する。 みんながおいしいおいしいと食べている。家族だんらんで笑顔で食べている。
3　自己を見つめる ＶＴＲ（自作：体験学習の映像等）を視聴し、体験学習などで、役に立てて嬉しかったこと等を考える。	【価値の自覚化における工夫】 ・体験活動等を振り返らせることにより、価値の自覚化を図る。
4　教師の説話を聞く。	【意欲化における工夫】 ・説話を聞き、意欲化を図る。

【考察】
授業では、高森町の主要産業である畜産農家の人々の「働く姿」から取材した題材を使用した。生徒は身近な題材であるだけに、興味を持って授業に取り組み、勤労の尊さを感じることができた。
併せて、農業宿泊・職場体験や総合的な学習の時間で学習したことや親の暮らしとも重ね合わせながら「働くことの意味」を考え、食べ物や働く人々への感謝の心が芽生えてきた。

エ　授業における食に関する素材の活用

日常の授業において、食に関する素材を活用することで、生徒の興味・関心や授業の質を高めることが可能な場合がある。

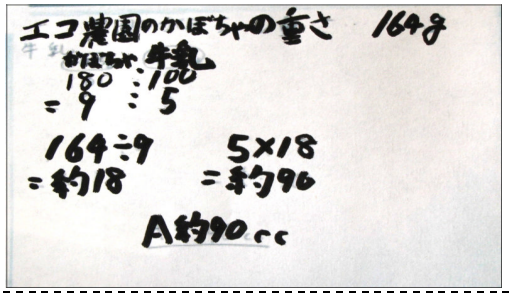
次の例は、数学科の比例式の学習で、総合的な学習の時間に生徒が栽培したかぼちゃを教材として使用した取組である。

□ 資料　授業実践　　第１学年　数学

【題材名】　「比例式」　（「命を大切にする生徒」像 Ａ・Ｄ）

【本時の目標】　比例式を利用して、エコ農園のかぼちゃから、かぼちゃプリンを作るときの材料の分量を求めることができる。（数学的な見方・考え方）

【授業の実際】

主な学習活動と授業の様子	指導のポイント
1　かぼちゃプリンのレシピを確認する。 ★かぼちゃプリン★（６個分） ①　かぼちゃ（皮つき）　180g ②　牛乳　100cc ③　生クリーム　60g ④　砂糖　35g ⑤　卵　2個	【興味・関心を高める工夫】 ・総合的な学習の時間において ECO 農園で栽培しているぼちゃの重さで問題を解かせていくことにより、関心を高めさせる。
2　それぞれの ECO 農園のかぼちゃの重さを量り、材料の分量を求める。 私のかぼちゃはあれより大きいから牛乳も多いはずだよね。 	
3　ホワイトボードを使って自分の考えを発表し、対話活動により考えを深める。 同じかぼちゃを使った場合、２つのかぼちゃプリンの味は違いますか？同じですか？ 比の性質を考えると、同じ味になるよね。 二人組の対話活動	【言語活動の場の設定の工夫】 ・ホワイトボードに自分の考えを整理し、まとめることで、道筋を立てて説明を行えるようにする。 ・二人組の対話活動の工夫 自分の考えを他の人に伝えることで、自分の考えを整理させる。
4　給食の分量の計算方法を知る。 チキンライスを作るとき、米100gに対してバターは15g必要です。給食でも全校生徒分を作るためには、このような比例式を使って計算しています。 	【学校栄養職員の授業参加の工夫】 ・学校栄養職員の「比の活用法」を聞き、数学と給食の関わり、数学の学習事項の活用法等に気付かせる。

【考察】

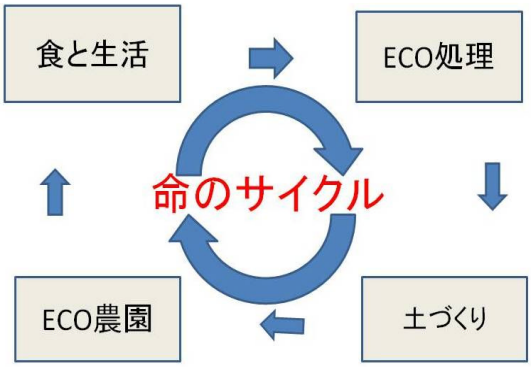
生徒は ECO 農園で栽培したかぼちゃの実物に触れ、学習意欲の喚起を図ることができた。それを契機に、教材として食に関する具体物を問題文として活用することで、比例式の理解を深めさせる契機となった。このことを通して、具体的なイメージも膨らみ、比例式に関する対話等の言語活動も活性化していった。

併せて、身近な給食において比例式が活用されていることを知り、数学と生活場面との関連を実感することができた。

② 「命のサイクル」を中心とした教育実践（総合的な学習の時間）

「命のサイクル」とは、本校の総合的な学習の時間の中核をなす活動のことである。この活動は本研究テーマを具現化するための根幹になる活動でもある。

本校の総合的な学習の時間は、「大地学習」と呼ばれている。「大地学習」は、全校生徒で行う「体験活動」と学年単位で行う「大地タイム」から編成されている。体験活動の中核となるのは、学校近隣から採取した土着の有用微生物を活用して行う環境浄化活動・栽培活動等からなる「命のサイクル」（右図参照）である。



本研究テーマを推進するためには、「体験活動」における「命のサイクル」の実践の中で、食は自然の恵みと人間の労働から作られること、命は食によって支えられていること等を生徒に体感させ、「大地タイム」で、発展的・探究的に学ばせることが必要であると考えた。

ア 「体験活動」における取組

大地学習における体験活動のうち、食育に関連する内容は、以下のとおりである。

(ｱ) 「大地学習」ガイダンス

「大地学習」の取組の流れを、３年生が新入生に対して説明する活動である。「命のサイクル」における４つの活動についてプレゼンテーションを行い、「大地学習」についての流れを確認する。

(ｲ) ひめゆりＥＣＯ菌採取・培養 【ECO 処理・土づくり】

土着の有用微生物（ひめゆりＥＣＯ菌）を採取し、培養する活動である。炊いたご飯を学校近隣の山林の落葉の中に仕掛け、約１週間後に菌が付着した状態で持ち帰り、糖蜜（砂糖）と少量の水を加えて菌を培養する（上澄み液をＥＣＯ原液と言う）。これが、「命のサイクル」の根幹となる活動である。

(ｳ) ぼかしづくり【ECO 処理・土づくり】

毎日の残菜処理に活用する１年分のぼかしを作成する。米ぬかにＥＣＯ原液・糖蜜等を入れ、よく混ぜ、樽に詰める。２ヶ月ほど発酵させた後、夏休みに室内で乾燥させた後、再度樽詰めして保存して、「命のサイクル」の「ＥＣＯ処理」で使用する。

(ｴ) みさを大豆栽培【ECO 農園】

ＥＣＯ農園において、本校区と深い関わりのあるみさを大豆の栽培を全校生徒で行っている。種まき、除草、収穫という一連の活動を行っている。

(ｵ) ＥＣＯ発酵液づくり・活用【ECO 処理】

家庭から出される廃棄物である米のとぎ汁に、糖蜜とＥＣＯ原液を混ぜて発酵させて作る。プール掃除、拭き掃除、トイレ掃除等に利用する。

(ｶ) ひめゆり石鹸づくり【ECO 処理】

給食調理場から出る廃油とＥＣＯ発酵液を材料にして廃油石鹸（ひめゆり石鹸）を作る。校内や家庭で使用したり、啓発活動に利用したりする。

(ｷ) 郷土料理教室【食と生活】

地元食生活改善推進員の会の方々の指導による郷土料理教室を行った。全校生徒が大地タイムを中心に農園で栽培し収穫したみさを大豆を使って豆腐やジャンボいなり、だご汁を作った。全校生徒及び職員で編制した縦割り班で作業を分担し、完成後は地域の方々と一緒に会食を行った。

地域の料理名人との交流を含めて大変意義のある食育活動となっている。

（当日の献立）

(ｸ) ＥＣＯ当番の活動【ECO 処理・土づくり】

環境委員会の常時活動（昼休み）として全校生徒で取り組んでいる。調理場からでた野菜の切り屑、皮等と給食の残菜をＥＣＯぼかしで処理して発酵させ、ＥＣＯ農園のコンポストに移して堆肥にしている。

［生徒の感想から］
小学校の時は環境のことなど考えたことはなかったけど、中学生になって、いつも環境のことについて考えるようになりました。ぜひ家でもここで学んだことを生かしていきたいです。（中略）人が生きていくには、食べ物が必要です。食べ物を作るには肥料が欠かせません。そのために、このＥＣＯ処理という作業は大切だと改めて思いました。

イ 「大地タイム」における取組

大地タイムでは、各学年で下表のようにテーマや領域を設定している。

学年	テーマ	領 域	今年度の具体的な内容
１年	大地を知る　～体験と感動～	農 業	農園での栽培・収穫等
２年	大地を追究する　～理想と現実～	食と生活	発酵食品・畜産等
３年	大地を創造する　～啓発と実践～	情報発信	啓発活動、ﾘｻｲｸﾙ活動等

各学年とも食育及び環境という大きな柱のもと、探究的な学習が進められており、各教科、道徳及び特活との関連も深まっている。

ウ 「大地タイム」の活動例

３年生の「大地タイム」では、啓発活動を行っている。平成２２年度は、「熊本県食育子ども特派員（熊本県健康づくり推進課の事業）」及び「啓発劇」の２つの取組を行った。高森東小中合同給食にて上演した「啓発劇」の取組は、以下のとおりである。

［食育子ども特派員レポート No.7 から］

「小中合同給食」　　高森東中学校３年　啓発班

私たちは、１０月２８日に小中合同給食会を行いました。ハロウィンにちなんで「ごーすと」や「かぼちゃ」などの班に分かれて給食を食べました。後半は高森東保育園の年長さんも参加して、中学３年生が小学生・園児向けに、野菜をたくさん食べて大きくなって欲しいという思いを込めて「総合的な学習の時間」に作成した「食育レンジャー」による劇を一緒に見たり、パンプキンプリンを一緒

に食べたりしました。

劇『野菜を食べよう』の内容は、「お菓子王国」に支配された子どもたちが、虫歯や栄養失調で苦しみ、その子どもたちを「野菜王国」の使者たちが救うというものです。「パンプキング」や「キャロリング」が「キャロケット」「サラダボール」などの必殺技を使って、「チョコレート王」や「クッキー王女」と対決する場面はとても盛り上がりました。

小学生や保育園児のみなさんも喜んでくれて、わかりやすく食の大切さを伝えることができました。

啓発活動の一つとして、保育園児及び小学生に本校の食育に関する取組をわかりやすく伝えるために、劇に取り組むことになった。親しみのあるキャラクター設定など、生徒の創意工夫が随所に織り込まれた劇になった。「パンプキングが出て、こうげきを防いだので、『なるほど、かぼちゃには体に悪いものを防ぐ成分があるんだな。』と感心しながら見ました。今日の合同給食で中学生のやっていることが理解できてよかったです。ぼくは、きらいな野菜があるので、こくふくしていきます。」という小学生の感想が寄せられるなど、有意義な啓発活動を行うことができた。

(2)　学校給食部の取組

学校給食部においては、以下の５つの視点を設けて取り組むことにした。

①	給食指導年間計画に基づいた指導
②	給食の時間の指導の工夫
③	献立の工夫
④	家庭との連携
⑤	保小中および地域との連携

①　給食指導年間計画に基づいた指導

給食指導においても、年間計画を作成し、月毎や学期毎の指導目標を決め、計画的指導にあたっている。

②　給食の時間の指導の工夫

本校はランチルームで全学年一斉に配膳、食事をする形態となっている。学年ごとに分かれ、全職員がついて食事のマナー等の指導を行っている。

ア　給食準備・配膳の工夫

「給食当番チェック表」で衛生面の確認を行っている。衛生面に対する生徒の意識が高まり、服装を整えたり手洗いの徹底が図られたりするなどの効果が現れている。

イ　「食のポイント」による「食のマエストロ」の取組

本校では、給食の時間においてメニューに関する基本的事項の理解を深めさせるために、「食のポイント」による「食のマエストロ」の取組を行っている。

【「食のポイント」による「食のマエストロ」の取組】
① 学校栄養職員が、栄養、マナー及び食材に関するエピソード等を載せた「食のポイント」を作成する。
② 「食のマエストロ」が給食時に「食のポイント」を紹介する。
※「食のマエストロ」は、生徒が輪番で担当。本年度から、職員も参加し、専門教科と関連した話を行うようにしている。
③ 給食後、「食のマエストロ」が感想を記入する。併せて、学校栄養職員及び調理員が返事を書き、各学級に掲示する。

学校栄養職員がスライド資料を作成し、上記の内容を直接生徒に指導することもある。給食の献立そのものが給食の時間の話題となることが増えるなど、この取組が給食に関する生徒の関心を高める実践の一つとなっている。また、返事を書いていただく調理員の方々に対する感謝の気持ちを示すために、生徒側から感謝状を渡す取組も行っている。

③　献立の工夫

ア　季節や行事に応じた献立の工夫

生徒の献立に対する興味・関心を高めるために、季節や行事に合った献立を作るように配慮し、給食メニューに彩りを添えている。

さらに、本年度は生徒の誕生日を祝う「特別デザートの日」（月１回）を設け、全員でお祝いをするようにしている。

新入生入学お祝いメニュー
（赤飯　４月１３日）

イ　地産地消の献立作り

地産地消を推進するために、高森町特産のミニトマト・なす・メロン・ヤマメなどを使ったメニューを学校給食で生徒に提供している。その際、学校栄養職員による説明や、いちごやメロンの生産農家から直接話を聞く機会を設けるなどの工夫をしている。

給食に出されたヤマメの塩焼き

ウ　コラボ給食

社会・保健体育・家庭科等、教科の学習と関連したメニューを給食で提供している。給食の時間が、教科等で学習した内容を再確認する場となっている。

エ　食育月間・給食週間の取組

昨年度の６月の食育月間には、「世界の料理を味わおう」という取組を行った。サッカーワールドカップの開催に合わせ、日本の対戦国（カメルーン・オランダ・デンマーク）にちなんだ献立を作成した。対戦国に関するスライドの提示を行い、食を通して国際理解を図ることができた。本年度は、「地産地消の取組」と「歯の健康メニュー」という２つのテーマで実施した。昨年度の給食週間は、生徒が考えた献立等を中心にメニューの工夫を行った。

④　家庭との連携

ア　「親子料理教室」及び「お弁当の日」の取組

今年度は、以下の流れで取り組んだ。

４月	親子料理教室	お弁当作りの事前学習として実施
５月	第１回お弁当の日	親子料理教室で習ったことを生かして作ろう
８月	食育講演会 （親子参加）	演題　「食育における弁当の意義」 ～家族のくらしを見つめ直す弁当の力～ 講師　九州大学農学部助教　佐藤剛志氏
９月	第２回お弁当の日	地域の食材を使って作ろう（地産地消のお弁当作り）

親子料理教室では、班ごとに一人一品の担当を決め、調理を行った。保護者にも生徒の支援者として一緒に参加していただいた。

［保護者の感想から］

久し振りに子どもと一緒に料理を作れて楽しかったです。やはり、女の子が要領が良いように思います。男の子でも基本的な事は教えておいた方が良いなと思いました。色どりが良くとても美味しかったです。これからのお弁当の日の取組が楽しみです。

親子料理教室の献立

卵焼き、簡単煮物、
ほうれそんそうのごまみそあえ、
たこさんウインナー

「お弁当の日」の取組は、次のような流れで行った。

１）　学校栄養職員から献立作りのポイントを聞く。（朝の全校集会時）

２）　校長のお弁当作りの体験を聞く。（給食時）

３）　お弁当の献立を考え、提出する。（家庭学習）

４）　学校栄養職員からアドバイスをもらい、献立を修正する。

［生徒の感想から］

初めて弁当を作って、とても大変でした。いなりを作るのが 一番大変でした。朝早くてねむかったけれど、おいしいものがお父さんと一緒に作れたので良かったです。また、初めて弁当づくりの大変さが伝わってきました。これからも、いっぱい手伝いをしていきたいです。

［保護者の感想］

前日の夜から一生懸命に準備をし、要領よく頑張っていました。途中味見が多く、片付けは私がしました。とてもおいしそうにできて良かったです。

（手作りお弁当の様子）

これらの活動を通して、生徒は、食の重要性に気づき、感謝の心をもつことができた。

イ　食育通信・献立表・保健だよりの活用

(ｱ) 食育通信

月に２回発行し、食に関する情報を保護者に提供している。

(ｲ) 献立表

学校栄養職員が出している毎月の献立表には、献立工夫のポイント等も掲載している。

(ｳ) 保健だより

養護教諭が発行している「保健だより」には、健康づくりの視点から、食に関する内容も掲載している。

ウ　健康チェックカードの活用

保健委員会を中心に健康チェックカードを活用した取組を毎月１週間行っている。このカードには、睡眠・つめ・ハンカチなどとともに、朝ごはんを食べたかどうかも点数化して記入するようになっている。朝ご飯のメニューを記入するようになっており、主食、主菜、副菜のバランスのとれた食事がとれたかどうかを確認できるようになっている。保護者の感想として、「朝からご飯と目玉焼きを食べてくれるようになりました。きらいなみそ汁まで食べてくれたらいいですね。」という内容のものも寄せられ、保護者や生徒にも浸透している。

□ 資料　健康チェックカードの記入例

高森東中　元気っズ銀行　健康貯金　預け入れ票

１２月の保健目標　「かぜ予防に心がけ、寒冷期の健康について考えよう」

朝の目覚め	スッキリ目が覚めた	2	少し眠かった	1	なかなか起きられなかった	0
朝ごはん	バランスを考えて食べた	2	食べた	1	食べなかった	0
つめ	ちょうどいい長さ	2	短い	1	伸びている	0
ハンカチ	持ってきた	2			持ってきていない	0

エ　ＰＴＡとの連携

ＰＴＡ行事における保護者の出席率は毎回高く、ほぼ８～９割程度であり、学習・啓発の格好の場となっている。

(ｱ) 食育研修

ＰＴＡ総会、例会開始前に、この研修には保護者だけでなく生徒も参加している。学校栄養職員の講話やＤＶＤ(「学校給食を通じた食育の推進」文部科学省制作、「はじめよう！早寝早起き朝ごはん」県教委制作)の視聴などを行い食育研修の機会を設け、保護者の食に関する理解を深めている。

(ｲ) 親子料理教室

ＰＴＡ例会時にＰＴＡ主催の親子料理教室を実施している。

(ｳ) 給食試食会

一学期のＰＴＡ例会時に保護者対象の給食試食会を実施している。保護者へのアンケートも行い、その結果を食育通信に掲載した。

(ｴ) ＰＴＡ親子体験活動（全学年レクリエーション）

本校では、これまで学年毎に学年ＰＴＡレクリエーションを行ってきたが、生徒数の減少に伴い、本年度は３学年合同の形でＰＴＡ親子体験活動を実施した。内容は、夏季休業日を利用した宇城市三角町「食と農の体験塾」での石釜を使ったパン・ピザ作りである。当日は、主宰の宮田研蔵さんから、健康と環境と食の関係についてのミニ講話もしていただいた。

⑤ 保小中および地域との連携

ア 小中連携（小中合同給食）

本校に隣接している高森東小学校とは、給食指導に関しても連携を図っている。給食の時間の指導に学校栄養職員が作成した「食のポイント」やスライド資料を共用したり、小学校の給食担当者と学校栄養職員の連絡を密にしたりするなどの方法で、給食指導について、共通理解を図っている。

また、小中合同給食も年１回行っている。平成２２年度は、高森東小学校体育館において、保小中連携による合同給食を実施した。隣接している保育園の年長組の園児も参加する形に拡大し、３年生が総合的な学習の時間で作成した啓発劇を上演した。平成２３年度は、「七夕給食」と称して合同給食を行った。

イ 高森東中学校区保小中連携推進委員会

高森東中学校区には「高森東中学校区保小中連携推進委員会」という組織があり、その組織を生かして、食に関する連携した取組を進めている。

取組の一つとして、児童及び生徒の実態を踏まえた食育講演会を実施してきた。平成２２年度は、「子どもの能力を引き出す朝食パワー」の演題で大津高等学校養護教諭森和子氏に、平成２３年度は、「食育における弁当の意義～家族のくらしを見つめ直す弁当の力」の演題で九州大学農学部助教佐藤剛史氏に講演をいただいた。地域住民を含め、１００名を超す参加を得ることができた。

［参加者の感想から］

講演を聞けてすごくよかったです。親の愛情をたくさんもらって自分が育ってきたということを実感しました。料理を作って「おいしい」と言ってもらったときはすごくうれしくて、何度も同じメニューを作っていたのを思い出しました。

「性・生・食」のつながりの中で、「食」の大切さを伝えていけるよう私自身、自分の食事を見直そうと思いました。　（一部抜粋）

併せて、講演内容等を掲載した「高森東中学校区保小中連携推進委員会」通信も発行し、地域啓発に努めた。

ウ 地域との連携

地域啓発の一環として、平成２２年度に３年生が作成した熊本県「食育子ども特派員レポート集」を全保護者へ配布し、校区内の全家庭へ回覧を行った。また、年３回の学校公開日を行っているが、１回は地域の方々に給食を食べる場を設け、本校の取組を理解していただき、連携を深める場としている。さらに、今年度、学校ホームページを開設し、食育・環境教育の取組を中心とした情報発信を行っている。

高森町立高森東中学校ＨＰ　http://www.higo.ed.jp/jhs/takamoej/

7　研究の成果と課題

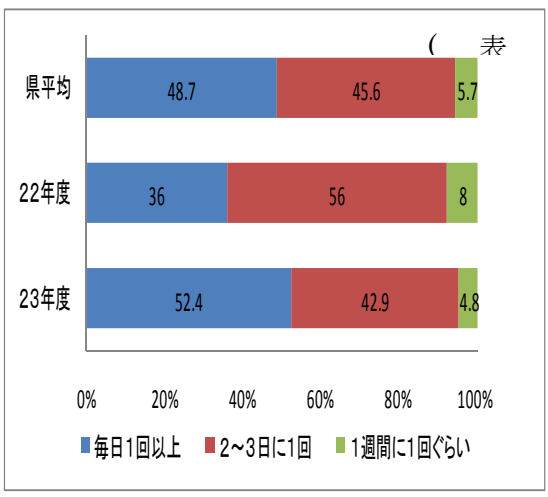
本研究を通して、以上のような成果と課題を確認することができた。

(1)　仮説１について【食育推進部の取組を中心として（○成果　△課題）】

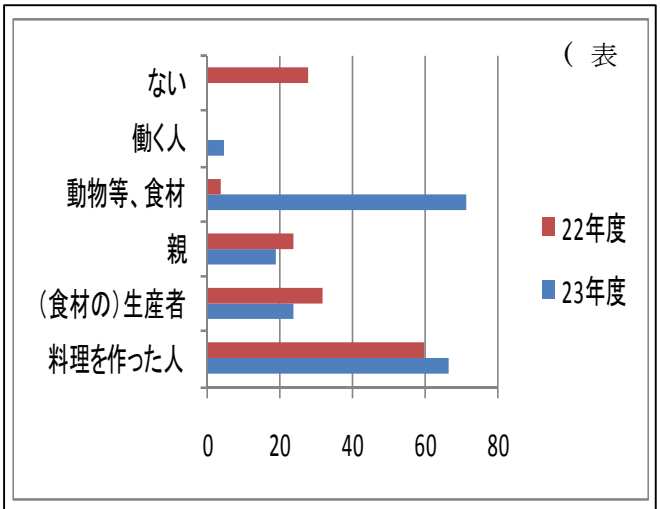
○　食育を教科等で推進していく際、すべての教科等で食育を進めていくことが可能であることや、教科等の目標達成を踏まえながら食育の視点を関連付けていくことは効果的であった。

○　学校栄養職員・養護教諭の専門性を生かし、授業にティームティーチングの授業形態で参加することは、食に対する知識や実践力を身に付ける上で効果的であった。

○　授業で学んだ内容と給食の献立との関連を図ることで、給食の時間が楽しく、かつ、学習の確認の場となった。また、各教科等の学習の理解を深めたり、生徒の生活リズムを考えたりする契機にもなった。（表１参照）



排便をどのくらいの周期でしますか。



食事をするときに、誰かに感謝して食事を

○　地域の方や保護者の授業への参加・協力を進めたことにより、生徒が食に対する感謝の気持ちを抱いたり、地域の食文化への関心を高めたりするようになった。
（表２参照）

○　食に関する素材を活用し、指導法を工夫することは、教科の学習と食に関する体験活動等との関連を図り、生徒の関心意欲を高めることはもとより、理解を深めるうえで効果的であった。また、直感に訴えたりイメージを膨らませたりしながら言語活動を充実させ、授業のねらいに迫っていくことができた。

○　「命のサイクル」（総合的な学習の時間）を食育の根幹にすえたことにより、本校の伝統的な環境教育の質を高めることはもとより、食物を育む自然や人々に目を向け、感謝の念を抱くことが

できる取組へ繋げることができた。このことは、総合的な学習の時間における課題把握、情報収集、整理・分析及び発信等の活動を活性化し、食に関するテーマに迫る中で、命を大切にしようとする心情を育むことに繋がっていった。

△　食育推進部においては、年間計画に基づき４つの視点をもとに実践を進めてきたが、授業形態の在り方及び指導方法の工夫等においては改善の余地があり、さらに、教科の目標達成と学校給食との接続等について研究を深めていく必要がある。また、新学習指導要領の全面実施に向けて教科等の内容を洗い出し、年間指導計画を作成するとともに、学校栄養職員の参画についても計画を作成する必要がある。

仮説１については、以上のような成果と課題を確認することができた。また、ある生徒は食について次のように述べており、主体的に食に関わっていこうとする姿勢が育ってきている。

［生徒の作文から抜粋］

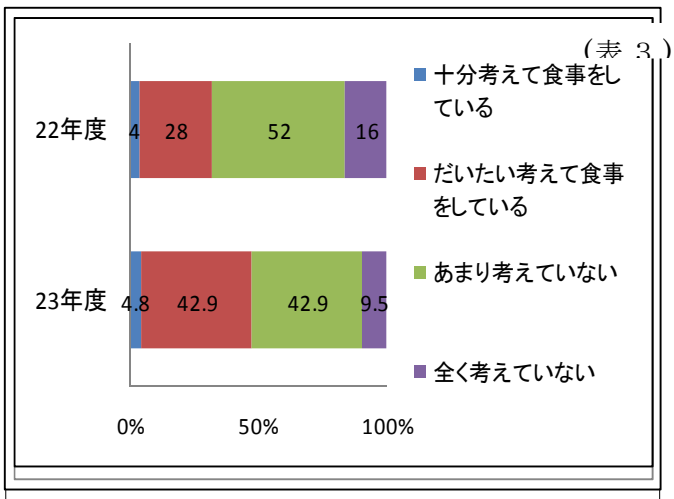
「いただきます。」といってから食事をしていることがあたりまえになってきた今の時代。自分が健康でいるためには、動物や植物の命をいただかないと生活していけません。　～中略～　これからは、いただく命に感謝しておいしく食べたいと思います。

(2)　仮説２について　【学校給食部の取組を中心として（○成果　△課題）】

○　学校給食において、生徒間に衛生面に気を付けたり、栄養のバランスを考えたりしようとする意識の高まりが見られるなど、主体的、意欲的に食に関わっていこうとする姿勢が育ってきた。

○　給食の時間の指導の工夫においては、食のポイントによる「給食マエストロ」の取組を通して、生徒間の話題も食に関するものが増え、給食の時間が学習の場へと少しずつ変化してきている。その結果、給食の時間において食事のバランスに気を付けるような会話がなされ、家庭における食生活の改善にもつながっている。

（表３）



家庭で栄養のバランスを考えて食事をしてい

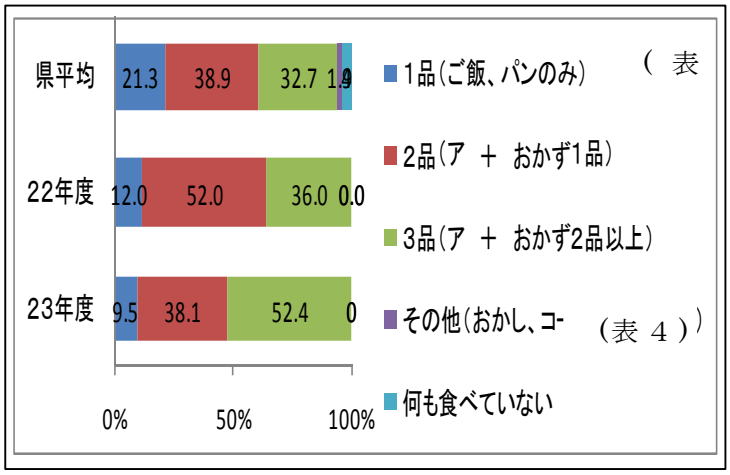
特に、個別指導を通して食生活の改善を図ったり、家庭への協力を依頼したりすることで、生徒は右表のように食事のバランスを徐々に考えるようになってきた。
（表３参照）

○　給食の献立において季節や行事に応じた献立を工夫することにより、給食の時間が地域の食料生産や食文化について学習する場となった。特に、給食の献立に地域の食材を取り入れることにより、地域の食料生産への関心を持つとともに、地域の「食文化」への理解を深め、感謝の気持ちを持とうとする生徒が増えてきた。

○　保小中および地域との連携を図るために、学校の取組を発信したり、保小中の食に関する課題解決に向けた食育講演会への参加や各種行事への協力をいただいたりしたことにより、学校と地域が一体となって食育の大切さを感じていただけるようになった。例えば、食育講演会には地域の多くの方々も参加していただくなど、地域における食に対する関心が高まってきた。また、食に関する活動では、地域の方々が学校を支援していこうとする意識が以前にも増して高くなり、地域との繋がりがより深まってきた。

○　親子料理教室やお弁当の日の取組などを通して、家庭との連携が進み、保護者の意識の高まりや家庭の食生活にも改善が見られた。

併せて、ＰＴＡ研修会等において繰り返し朝食等の重要性を伝え、各家庭に協力していただくことにより、朝食の品数が増え、お弁当の日にも好意的に取り組んでいただくようになってきた。（表４参照）



（表４）

今日はどんな朝食を食べてきましたか。

△　学校給食部においては、年間計画に基づき実践を進める中で一定の成果を得ることができたが、学校給食におけるマナー面及び情意面、また、家庭における食習慣の形成等において、学校で学習した知識や食への理解が、実際の生活の中で実践できていない部分もある。今後も、学校給食を通して望ましい食習慣の形成をめざして取り組んでいくことが必要である。

仮説２については、以上のような成果と課題を確認することがで

きた。また、ある保護者は食について次のような思いを語られ、食に関わっていくことの大切さを実感されていた。

［保護者の食に関する感想から抜粋］

これまで早寝早起きや朝ご飯などについては、家庭でもいろいろと考えてきましたが、

東中学校の食育における講演会、体験活動、親子料理教室、お弁当の取組などを通して、

改めて、生活リズムや食の大切さを感じました。これから育っていく子どもたちへ、

家庭でできる精一杯の関わりをしていきたいと思っています。

以上２つの仮説における成果を確認する中、生徒は食と命との繋がりを徐々に考えるようになり、各教科及び各種行事等の感想等において、「自分たちは、生かされている。」「食は命の繋がりによって支えられている。」と、いったような意識を抱くようになってきた。

今後、この意識をさらに高めていくことができるようにするためにも、研究を継続し充実させていきたいと考える。

お わ り に

本校は、平成２２年から２カ年にわたり、熊本県教育委員会指定並びに熊本県学校給食会委嘱を受け「学校給食・食育推進校」として研究を進めてまいりました。

「命を大切にする生徒の育成 ～食育における指導法の工夫および学校給食の充実を通して～ 」という研究テーマのもと、職員、生徒、保護者、そして地域の方々が手を取り合って、学校教育における食育の推進を目指しました。一口に食育と言っても、給食の時間、日々の授業、日常活動等色々なものがあります。この全ての学びは、生徒の意識を「食べることに関する学び」だけではなく、「生涯にわたって自らの命を支える礎となる重要な学び」へと高めてくれました。

特に、食育の実践を通して、生徒が科学的な見地から自らの生活を見つめ直すことはもとより、食を考えることで家族の関係を意識したり、地域の食文化を誇りに思う意識へと高まったりしたことは、研究の大きな成果だと思っています。改めて、食に向き合うことは、笑みに満ちた生徒や保護者の姿を育み、自らの進路を開拓する「生きる力」の育成につながる大切な学びだと実感いたしました。

最後になりましたが、本校の研究推進にあたりまして、御指導及び御助言を賜りました、熊本県教育委員会、熊本県学校給食会並びに高森町教育委員会をはじめとする関係者の方々に対しまして心から感謝申しあげます。

平成２３年１０月２０日

高森町立高森東中学校　教頭　中村 賀一

【参考文献等】

［ 書名等 ］	［ 出版社名 ］
中学校学習指導要領解説総則編他全教科・・・・・・・・・・・	文部科学省(ぎょうせい)
食に関する指導参考資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	文部科学省(東山書房)
食に関する指導の手引き・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	文部科学省
食生活学習教材（中学校用）食生活を考えよう・・・・・・・	文部科学省
食育実践マニュアル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	熊本県教育委員会
「食に関する実態調査」結果、「体験活動推進校」実践報告書・	熊本県教育委員会
「学校における食育の推進」～望ましい食習慣の形成を目指して～	熊本県教育委員会

【研究同人】

［平成２３年度職員］

校長	田邉 鶴芳	教諭	赤星 裕子	学校栄養職員	稲葉 恵美
教頭	中村 賀一	教諭	安方 由香	事務職員	三森 恵理
教諭	山内 康夫	教諭	池上 尊子	養護教諭(育休)	丸山 まゆみ
教諭	小野 祐介	教諭	石井 佑介	給食調理員	岩下 美子
教諭	山代 浩二	教諭	田上 茉依	給食調理員	本田 隆子
教諭	家入 かよ	養護助教諭	瓜生田 美恵	給食調理員	田上 裕子

［平成２２年度職員］

教諭	中村 昇二郎	教諭	米満 仁美	給食調理員	城井 若生